

ハ 市場で成立する価格が投機家の非合理的思考によって影響されるようになること。

ホ 市場で成立する価格が暗黙の前提であつた投機家同士の合意を得られないで決まること。

[illegible]

ある。これを読んで、次の問に答えよ。

そこには世界各国の物資が チンレツされていた。それらを照らし出すのは当時のテクノロジーの最先端をいく夜間照明。世界をヨーロッパを中心に序列化し、

「今日ハ博覧会ヲ見物致候ガ、大仕掛ニテ何ガ何ヤラ一向方角サヘ分リ兼候。」

③ エッフェル塔の上から見れば、

4

如月小春

子規からの手紙

・センター試験

・センター試験

· 立教大学

・専修大学

· 和光大学
· 名城大学

2

「れる者ともなったソーセキの中で、自意識の混乱が始まる。資本主義のあたりす一大スペクタクルとしてのパリやロンドン。その都市的喧噪の只中で、ソーセキは必死に自分の名を繰り返すのだ。『My name is KINOSUKE NATSUME. I came from JAPAN.』」

④ そう繰り返しながらソーセキは二十世紀最初の年のロンドンを歩く。そして、「発見」する。「往来ニテ向フカラ背ノ低キ妙ナキタナキ奴ガ来タト思ヘバ我姿ノ鏡ニウツリシナリ。我々ノ黄ナルハ当地ニ来テ始メテ成程ト合点スルナリ。」

⑤ 姿見の中にそれを見るソーセキ。彼の二十世紀はこうして、鏡の中で始まったのだ。

⑥ 一九〇一年、即ち明治三十四年頃には、シキの病状は進んでいる。部屋の中を這って移動することもかなわない。病牀のシキと、枕元の青年との対話。寝たきりになってしまっても、シキの旺盛な知識欲は広がり続ける世界をカツボウし、新しい出来事について、矢継ぎ早やに質問を繰り返す。『病牀六尺』明治三十五年五月二十六日の記述。その中でシキは、見てみたいと思う物をあげている。

「一、活動写真

一、自転車競争及び曲乗

一、動物園の獅子及び駝鳥

一、浅草水族館

30

20

3

一、自動電話及び紅色郵便箱
一、ピヤホール
一、女剣舞及び洋式演劇
一、蝦茶袴の運動会

⑦ ここには、変わりつつあった東京を、博覧会的に俯瞰する眼差しがある。電話や郵便のシステムの登場、エンタテインメントの質的変貌。欧米を規範として行なわれた新しい都市創造への試みの数々だ。中でも第一番にあげられた「活動写真」が、シキの「見ること」への強い欲望を示している。活動写真の登場は単に新種の「ゴラク」として以上の意味を持っていたのだ。それは一般の人々にとって、今までにはなかった視覚体験を日常的に手に入れることであつた。

⑧ 活動写真の前段ともいえる新しい視覚装置に、パノラマがある。映画が庶民のゴラクとなる前の一時的に花開いた見世物であるパノラマは、浅草をはじめとして、各都市の盛り場に相継いで出現し、人気を博した。——その仕掛け。

⑨ 巨大な円型ドームの内側に三六〇度描かれた絵画を、中央の観覧台から眺めるのだが、近景に置き物、遠景にペンキ絵を配して照明をあて、効果音を流すと、見物人はあたかも風景の中に自分が入り込んだかのような。サッカクにおちいる。このような光を利用したスペクタクルはそれまでになく、パノラマは、明治の人々がはじめて出会った文明の見世物となった。内容には戦闘場面が選ばれる

50

45

40

35

ことが多く、特に明治二十九年以降は日清戦争を題材としたものが用いられている。近代日本の、海外へ向けて拡大しようとする国家的欲望を具体化したのが日清戦争であったとするならば、その情景を臨場感いっぱいに描き出したパノラマは、庶民の眼差しを世界に向けて解き放つてゆくメディアとして機能したといえるだろう。「見られる側」としてでなく、「見る側」に立つ為のスローガンが「脱亜入欧」であり、日清戦争の勝利によって日本は、その未来を安易に樂觀したものである。変わること、変わり続けることで西欧に近づき、仲間に入り、アジアを侵略することで資本主義社会としての成功を手に入れること。ただ真直ぐにそのような未来に向かうことの危険とジレンマを予想だにしない、明るく、健康的な眼差し。¹⁰ シキは病床に釘づけにされたまま、日清戦争の勝利に湧く日本にいた。そんな彼に残されていたのは、近代化を生きる人々の、外側へと広がる欲望を共有し、新しい知覚体験を、言語化することだけだった。そしてソーセキは、シキをはじめとする日本から発せられた眼差しの先端部にいた。シキとソーセキは、一本の視線の両端にいて、共に新しい世界を見つめていたのだ。⁴ 二人の見たものはあまりにも違っていた。

(注) ○人間ヲ箱ニ入レテ鋼条ニテツルシ上ゲ、ツルシ下ス仕掛ケ……エレベーターのこと。
OKINOSUKE NATSUME……夏目漱石の本名(夏目金之助)。
○黄ナル……黄色人種であること。

60

問一 傍線部 a～e のカタカナを漢字に改めよ。

a	b	c	d	e

問二 傍線部 1「近代化を夢見、ヨーロッパを目指す日本」とあるが、日本が「近代化」を推し進めるためにしたことは、どのようなことか。それを最も端的に説明した一文を抜き出し、その最初の五字(句読点を含む)を答えよ。

--	--	--	--

問三 傍線部 2「ソーセキは必死に自分の名を繰り返すのだ」とあるが、「ソーセキ」はなぜ「必死に自分の名を繰り返し返す」のか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- イ 日本的なものを否定し、西欧的な自分を築きあげようとするため。
ロ アジアから抜け出すことのできない日本というものを再確認するため。
ハ 西欧の中で、日本人としてのアイデンティティを見失わないようにするため。
ニ 日本を代表する優れた文学者としての自己を西欧に誇示するため。
ホ 醜い黄色人種としての自分を冷静に見つめ、コンプレックスを捨ててため。

問四 傍線部 3「シキの旺盛な知識欲」とあるが、なぜ「シキ」は「旺盛な知識欲」を

持つようになったのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ 長い間、病床にあったシキにとって、西欧から見られる存在としての日本のあり方を確かめるためには、さまざまな知識を通して東京という都市のありようを知るしかなかったから。

ロ 病に苦しむだけでなく、自分が日本人であることのコンプレックスにも苦しんでいたシキにとって、その苦しみから脱却するためには、東京の新しく近代的な文化を知る必要があったから。

ハ 寝たきりで動くことのできないシキが、西欧の近代文明を肌で感じていたソーセキと同じような眼差しを獲得するには、変わりつつある東京を博覧会的にながめるしかなかったから。

ニ 近代化に湧きかえっていた明治の日本にありながら、寝たきりでいることを強いられていたシキにとっては、新しい知覚体験を通して人々と近代化への欲望を共有するしかなかったから。

ホ 重病に苦しみ続けていたシキは、その病床生活の反動から、ただ真直ぐに近代化への道を突き進もうとする人々の、明るい眼差しや健康的な肉体にあこがれざるをえなかったから。

問五 傍線部4「二人の見たものはあまりにも違っていた。」とあるが、「ソーセキが見たのはどのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選

び、記号で答えよ。

イ 西欧を中心とした尺度からすれば、日本は末端の小国に過ぎないし、日本人も西欧人に比べると見映えのしない存在であるということ。

ロ 自分が日本の近代化に貢献していくためには、ヨーロッパを実際に歩き回りながら、新しい文明を吸収していくしかないということ。

ハ 日本は西欧をモデルとした新しい世界に近づきつつあり、現在の変化の先には輝ける未来が約束されているということ。

ニ 日本は、西欧の帝国主義的な眼差しで見ればアジアの小国ではないのだから、アジアから抜け出す必要があるということ。

ホ 不格好な黄色人種である日本人は、西欧人の好奇の眼差しの前では「見られる」存在ではないということ。

問六

筆者の考え方と合致するものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ あらゆる人間は平等なのだから、黄色人種である日本人も努力次第で西欧人に肩を並べることができる。

ロ 本物の西欧文化を、喜びをもって見ることでできた漱石は、同じ時代を生きた子規よりも幸せであった。

ハ 高みから世界を見下すという行為は、世界を自分の場を中心とした秩序としてとらえ直すことに通じる。

二 活動写真もパノラマも、日本の庶民のゴラクであり、近代西欧文明と本質的には相容れないものである。
ホ 世界各国の物資がチンレッツされた万国博は、西欧諸国とそれ以外の国々とは同等の地位になった近代を象徴している。

生死と向き合う

第十二問

次の文章は、南木佳士の小説『ダイヤモンドダスト』の一節である。
マイク・チャンドラーは、ベトナム戦争の従軍経験をもつアメリカ人宣教師で、末期癌を患い、日本のある高原の病院に入院している。香坂はその医師、和夫はそこで働く看護師で、つい先日までマイクの病室には、和夫の父の松吉も入院していた。これを読んで、後の問に答えよ。

① あるかなきかの高原の町の夏が終わろうとしていた。マイクの病室の窓から見える県境の峠の頂^aには、すでに気の早い紅葉が点在し始めていた。

香坂が松吉の退院を急がせたのは、夏のピーク時で病室のやりくりができなくなったためではなく、実はマイクの病態の悪化が予想されたためらしいと気づいたのは、一週間ほどあとになってからのことだった。和夫が病室に姿を見せても、マイクはベッドに横になったまま背を向けていることが多くなった。手のつけられていない夕食のけんちん汁や塩ジャケを見ると、異国で不治の病を得てしまったアメリカ人としてのマイクが哀れに思えて、和夫はかける言葉がなかった。

② それから数日して、和夫が夜勤の夜、マイクの部屋からナースコールがあった。和夫は妙な胸さわぎがして、受話器を取る前に走り出した。勢いよくドアを開けると、マイクはベッドの上にあぐらをかいて肩を大きく上下させていた。カーテンを開け放してある広い窓は、深い森の闇への入口に見えた。就寝用の小灯だけ

〔出典〕
南木佳士
『ダイヤモンドダスト』

〔著者出題歴〕

- ・ センター試験
- ・ 福島大学
- ・ 筑波大学
- ・ 千葉大学
- ・ 京都大学
- ・ 大阪大学
- ・ 国士舘大学
- ・ 中京大学